

国立民族学博物館研究報告別冊 no.001; はじめに

著者	長野 泰彦
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	001
ページ	1-4
発行年	1983-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/3399

は じ め に

長 野 泰 彦*

本書は、昭和56・57年度国立民族学博物館共同研究「青木文教師将来チベット文物の研究」の成果の一部である。

昭和54年夏、国立民族学博物館は、初期入蔵者の1人、青木文教師のもたらしたチベット民族資料142点を購入した。その内訳は概ね、次の通りである。

仏教図像7点。チベット独自のタントリックな世界をよく代表するヘーヴァジュラ図像(目録番号5: 標本番号 H 64690)や画案のまわりに絵解きがなされているヘールカ図像(6: H 64691)が含まれる。

仏教図像白描6点。護符に用いられる白描で、極めてポピュラーなものだが、民間信仰との習合が観察される(特に11: H 64730, 12: H 64732)。

仏像6点。

仏教儀礼用具27点。寺院で用いられるものは少なく、ごく一般の人が家庭で使う道具が大半を占める。

民具・生活用具14点。遊びや賭ごとに使う羊骨製のさいころセット(53: H 64796)、蹴鞠のようににして婦女子が遊ぶ蹴羽根(54: H 64795)など、巷間の生活に密着した資料が多い。

衣類21点。ダライラマ13世より下賜されたと推定されるものを含む。袈裟が2点あるが、そのチベット式構造がよくトレースできて興味深い。

書籍類(洋装本)9点。85(H 64780)は青木師がロプサン・ツェリンの下で習得した成果と考えられる書翰文範で、師の勉強ぶりが窺える。

文献(チベット式のペチャ)52点。91(H 64727)はとりわけ、紺紙金泥の般若経で、立派なものだが、他の版本と校合すると、途中に陀羅尼が入っているのが特徴である。52点の内、蔵内文献(チベット大蔵経に入っている文献)は2点のみで、他は全て蔵外文献である。この点も青木師収集資料の特徴のひとつであろう。

上記の資料概要から推察される通り、青木師のもたらした資料は、ラサの市井の人々の生活を色濃く反映しており、ほぼ同時期に入蔵した河口慧海・多田等観両師の将

* 国立民族学博物館第1研究部

来品とは異質のものと言うことができる。各師の入蔵事情や将来品の性格などについては、佐々木高明「青木文教師とそのチベット将来資料」(pp. 173-183)に詳しい。

さて、青木師の将来した以上の民族資料は師の在蔵中に実際に使用されていたものとして、又、1910年代前半のラサという特定の場所の共時態を確実に映すものとして貴重である。だが、上にも述べたように、その内容は多岐に亘り、又、入手事情が必ずしも明確でないため、記述そのものかなりの困難を伴うものが少なくない。そこで、種々の分野からチベット研究者に集まっていただき、チベット人研究者の助力をも得て共同研究を組織することにし、資料の的確な記述と、そのチベット民族文化史上での位置づけに関する基礎的研究を行うこととした。その研究の成果の一部が、この目録とそれに付された4つの論考である。

この共同研究班は〈表〉に示すメンバーで昭和56年4月に発足、2年間の研究期間を設定した。運営は、テーマ別の記述作業会(プロジェクト)と、そこでの成果を吟味する全体検討会を並行させ、資料の精確な記述を重視する方針のもとに、56年度はプロジェクトを10回(延べ34日)、全体検討会を2回行った。57年度も同様のペースで検討作業が進行した。

目録作成には13名の共同研究員が当たった。プロジェクト別分担は〈表〉の担当分野の欄に明記してある。又、資料記述の各項末尾に主たる担当者を挙げたが、説明に不備があるとすれば、全て編者の責に帰すべきものである。プロジェクトのとりまとめ役は、文献については西岡と原田、図像・儀礼については立川、民具については星である。図版写真撮影は立川と森田が担当した。

目録の後に解説4篇を掲げた。この内3篇は青木師将来個別資料に関する精緻な論考で、チベット文化史上での各資料の位置づけにとどまらず、資料を通じてのチベット文化理解に新しい視座を提供するものと信ずる。他の1篇は青木師の時代、入蔵事情、資料購入の経緯等を明らかにしたもので、当資料の理解に不可欠の一文である。

日本のチベット学はほぼ世界的レベルにあると思われるが、これを支えてきた原動力は主として仏教学と文献学である。チベット仏典が、今は散佚した梵語典籍の再構成を可能ならしめる程、組織的且つ規則的な翻訳であったことから、仏教研究者にとって、チベット語は必須の研究手段と考えられたのである。しかし、このような研究態度にあっては、チベット研究はあくまでも補助手段に過ぎない。チベット独自の世界観や論理性に則ったチベット文化理解こそ、仏教研究にとっても生産的だと思うのだが、これは未だ少数意見に属する。

又、文献を用いた仏教を中心とする精神文化研究が高い水準を誇るのに対し、もう一方の輪となるべき物質文化研究は大変遅れていると言わざるを得ない。これには、現地調査が難しく、チベットを地域研究の対象としては考えにくかった等の理由が挙げられよう。しかし、比較的古くから日本にあるチベットの図像、仏像、儀礼用具についてすら、アイデンティフィケーションの基準となり得る記述研究は少ない。チベットをチベットとして理解し、その民族固有の文化を浮き彫りにするためには、チベット人の生活に密着したものに関する基礎的研究をも積み上げる必要がある、そのことが先学達の築き上げてきた斯学の伝統を生きたものにつながるのである。本目録はこのような認識を同じうする人々によって編まれた。

〈表〉 研究組織

氏名	所属 ¹⁾	担当分野 ²⁾
沖本克己	花園大学	蔵外文献
御牧克己	京都大学	蔵外文献
西岡祖秀	東京大学	蔵外文献
原田 覚	東洋文庫	蔵外文献
池田 練太郎	東洋文庫	蔵外文献
上杉隆英	東洋文庫	蔵内文献
平松敏雄 ³⁾	東洋文庫	蔵内文献
テンパ=ゲンツェン	東洋文庫	図像・儀礼
松本史朗	日本学術振興会 ¹⁰⁾	蔵外文献
小野田 俊蔵	仏教大学	蔵外文献
R.ギーブル	平河出版	儀 礼
木村隆徳 ³⁾	広 厳 寺	蔵外文献
頼富本宏	種智院大学	図 像
立川武蔵	名古屋大学 ⁴⁾	図像・儀礼
星 実千代	東京外国語大学	民俗・民具
中谷英明	神戸学院大学	蔵内文献
佐々木高明 ⁵⁾	国立民族学博物館	総括・儀礼
森田恒之 ⁶⁾	国立民族学博物館	図 像
井狩弥介 ³⁾	国立民族学博物館 ^{4), 8)}	儀 礼
山本順人 ³⁾	国立民族学博物館 ⁹⁾	儀 礼
煎本 孝	国立民族学博物館	儀 礼
長野泰彦 ⁷⁾	国立民族学博物館	図 像・言語

〈表〉 研究組織註

- 1) 56年度の所属を示してある。
- 2) 56・57年度の間で若干の移動がある。
- 3) 56年度のみ。
- 4) 57年度から国立民族学博物館併任教官。
- 5) 56年度代表者。
- 6) 57年度のみ。
- 7) 57年度代表者。
- 8) 57年4月から京都大学。
- 9) 57年4月から筑波大学。
- 10) 57年4月から駒沢大学。

【謝辞】 国立民族学博物館の共同研究に深い理解を示され、共同研究員の研究班への参加を快諾された各所属機関に対し、心から感謝の意を表したいと思う。館外共同研究員の尽力なくしては、この目録は成らなかったからである。

当館情報管理施設資料室の諸氏には、青木師将来資料の出し入れや管理に格別の配慮をいただいた。又、この共同研究の記述作業は情報カード作成と並行したため、事務補佐員 鈴鹿淳子氏を煩わすことが多かった。厚く御礼申し上げる次第である。

最後に、刊行審査の労をとられ、有益な助言を惜しまれなかった刊行物審査委員会と出版委員会に対し、深甚の謝意を表する。